

10) 12指腸ゾンデにより3例にオーミン 3.0gで全例虫卵陰転の成績を得たが、岩田等は6/6、更田等は1/1、麻生等は4/4に全例完全駆虫に成功している。オーミンの12指腸ゾンデによる駆虫は好成績を得るものと考ええる。

11) 17才～65才までのテトレンによる村民の鉤虫集団駆虫は、前夜予備下剤と服薬后下剤を使用して40.7%の虫卵陰転率であつた。

12) 市内学童のテトレンによる鉤虫集団駆虫は、当日予備下剤を投与して駆虫し95.0%、当日予備下剤を投与せずに駆虫し80.0%の虫卵陰転率で、予備下剤を使用した方が好結果を得た。副作用は前者は50.0%、後者は53.3%と同様であつた。テトレンと新ネマトールの併用は50.0%の虫卵陰転率であつた。

13) 市内高等学校学生のテトレンによる鉤虫の集団駆虫は、前夜予備下剤と服薬后下剤を投与して駆虫し78.8%の虫卵陰転率であつた。副作用は女子であつた為か100%に何らかの訴えがあつた。村民の集団駆虫例に於て虫卵陰転率に開きがあるのは虫体数を調査しなかつたので不明であるが、感染虫体の多寡に関係しているのではないかと考えられる。又、鉤虫の種類は甲府盆地に於ては95.1%にツビニ鉤虫を佐々木等は認めている。副作用は特に女子に於ては訴えが多いので、服薬量を考慮して投与する必要がある。

文 献 省 略

(本論文の詳細は東京医事新誌第72巻第7号に掲載。)

17. 農村学童の蛔虫反覆集団駆虫と感染状況について

大 田 秀 浄

山梨県甲府市の北方北の手にある主に農家より通学し、学園の環境は田畑にて囲まれたる学童の低学年を対象に蛔虫の毎月集団検便駆虫をなし、年間に於ける蛔虫の感染状況を知ると共に、各種駆虫剤による感染効果を知らんととして昭和28年7月より1年間観察した。

実 施 方 法

小学校生徒2年生男女59名を対象に昭和28年7月より毎月1回検便と各種駆虫剤による駆虫を実施した。1年間に13回の検便と12回の駆虫を実施した。検便は厚生省指示の塗抹法により、駆虫後の検便は3週間後に実施し、陽性者には検便后7日～10日の間に学校にて集団駆虫を行つた。

実 験 成 績 省 略

結 語

- 1) 毎月反復駆虫をなすことにより1年后に陽性者を36名(61%)より12名(20.3%)に減少せしめ得た。
- 2) 毎月反復駆虫をなすことによる継続陽性者は3ヶ月より0となすことを得た。
- 3) 新感染者は1名(2.8%)～3名(8.3%)に過ぎなかつた。

4) 再感染者は5月に16名(44.4%)にして、最低は9月、10月の2名であつた。新感染者より再感染者の方が多い。

5) 新再感染者を合せると5月に18名(50%)の山と11月13名(36.1%)、1月12名(33.3%)の二つの山がみられ、2ヶ月をさかのぼると、3月と9月、11月頃が感染の多い時期と推定される。

6) 反復駆虫をなすことにより未受精卵単独保有者が多くなり、且つ虫卵の多寡も卅世は減少している。新再感染者も同様の傾向あり。

7) 再感染までの月数は1ヶ月が最も多く、10ヶ月目の感染者は1名に過ぎなかつた。

8) 継続陰性者は新再感染者があるため、1年后まで陰性を続ける者は1名に過ぎなかつた。

9) 駆虫剤は新パトール3球の場合と、サントニン0.04、マクニン末0.5、アスキス球1球の併用が最も陰転率高く81.3%であつた。

10) 新再感染者の方が陽性を続けている者より駆虫による陰転率は高かつた。

(本論文の詳細は公衆衛生第18巻第4号に掲載。)